116

関東大震災と中央大学

一九二三（大正十二）年九月一日の関東大震災では、本学も多大な被害をこうむった。当時の錦町校舎は、一七年の失火で全焼後、翌年から再築校舎（本校舎）、予科校舎、図書館、増築校舎と建築が進められ、この年の四月にようやくその全容が整ったばかりであったが、夏休み中の学園を襲った地震と火災は図書館と増築校舎を残して他を灰塵に帰してしまった。

この二つの建物は一七年の火災の教訓により鉄筋コンクリート耐震耐火造りにしてあったために災禍をのがれたのである。付近一帯の建物も被害を受け、自宅を消失した花井卓蔵が図書館の三階で寝起きするという有様だった。

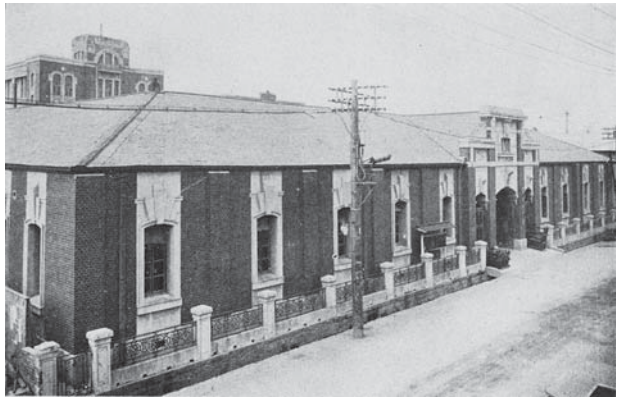
本学の被害金額は、校舎二棟、機械器具、出版物、取次販売書籍など合計二三万四千余円に及んだ。約四、七〇〇人の学生・教職員のうち罹災者は、死亡者七人（学生）、火災にあった者九四二人、家屋が倒壊した者四二人であった。

震災の余塵がくすぶる中で学園の再建が始められた。十月末には二階建ての本校舎の跡を平屋建てに建て直す工事が終わり、大学は新聞で学生に十一月一日からの講義再開を伝えた。他大学がそれぞれ他校の校舎を借用するなど講義の再開に苦慮したことを考えれば手狭になったとはいえ、はるかに恵まれていたわけである。

講義の再開に際して大学は、さしあたり必要な学用品を大阪学員会支部理事に託して購入し、学生控所として中庭に建てたバラック内で学生に販売した。当時の新聞には、学友会有志が臨時相談部を設け、本学罹災学生の宿舎、通学、教科書、学用品その他の相談に応じるという記事も見られる。これらの実態はよく知られていないが、学員・学生を含めた大学の素早い事態への対応には注目すべきものがあろう。

十一月一日に登校した学生は馬場愿治（げんじ）学長事務取扱の訓示を受け、同五日から平常通りの講義に参加した。教室の不足による合併授業という状態もあったが、震災後二ヵ月にして学園は元の活気を取り戻したと言えよう。

『法学新報』は講義再開後の状況を、「去る十月末を以て罹災後の応急工事出来十一月五日より授業を開始するに至り総て予定の如く進行し十一月一日より検定を継続したる新入学者も同五日に満員と為り日々の出席学生数は罹災前に優る盛況にして何れも熱心に就学し気勢一新の有様なり」と伝えている。



罹災後平屋建てに修築された本校舎

十月の段階で半数減の見込みと東京市に報告された本学の学生数も、十二月末の実際の減少数は七四人にとどまった。日本大学の一、四五九人、早稲田大学の一、二六〇人という大幅な減少に比較すれば、不幸中の幸いといえるだろう。

このような講義再開への動きは、学長岡野敬次郎が震災による事態の収拾のために文部大臣に就任することを懇請されて学長を退任し、その後を学長事務取扱として馬場愿治が引き継ぐという特殊な状況のもとで行われた。

大学令による真の大学としての第一歩を踏み出して間もない本学にとって、関東大震災は大きな試練であったが、学員、教職員、学生の協力によりこの試練を乗り切ることができたのである。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。